



生命の尊厳に基づく社会

千葉大学 名誉教授 磯野 可一

I. 現代社会

米国のサブプライム問題に端を発して、世界の金融界の破綻、株の大暴落により世界経済は大恐慌を来し、いまや、世界は大混乱に直面している。

日本社会はこの煽りをまともに受けて、有効な手段すら見いだせないまま、これまでの世界大国としての片鱗すらなく、借金大国として哀れな姿を晒し、混沌としている。その中で、国民は精神的、肉体的に不安と貧困を抱え動揺している。

これまで日本社会の根底を支えてきた武士道精神の仁、儀、愛の精神は影を潜め、虚偽、無責任、無秩序、非道徳が平然とまかり通る社会へと推移している。そして、悲しむべきかつ恐ろしい犯罪が後を絶たない。子供が親を、親が子供を殺傷するとか、まったく無関係な人を己の「憂さ」晴らしのために無差別に殺戮するなどのことが行われ、しかもその手口は想像を絶する残忍非道のものである。社会の片隅でこのようなニュースを毎日のように聞かされていると、「何故」「何をすべきか」「人間とは」などと考えさせられ、悩み、胸の痛くなる思がする。

このような社会様相は、東洋史観によれば混乱

破滅期ともいえる時期であり、次の、私たちの求める自主性と創造性に満ちた革命創業期に至るためには、己を捨てて、国、社会のために一身を捧げる、いわゆる英雄豪傑的人材の出現が望まれる。陰陽の説からみると今はまさに陰の時代であり、陽の時代の到来は、数年後と考えられる。私たちはじっと耐える時期かもしれない。

しかし、一方、単に時代の波に流されること無く、現在、「生」を受けている私たち一人ひとりが、何に心がける必要があるのかを思考すべきである。

そこで、人間の誕生と人間社会とがどのようにして構築されたか、その過程を尋ねてみたい。

II. 人間の誕生と人間社会の構築 (図1)

1. 地球の創生と生物の誕生

地球は宇宙の中の1つの恒星として、約45億年から40億年前に創造されたとされている。

そして、地球にある水中で無機物と有機化合物などが熱、光、氷などの種々の自然現象により、物理的、化学的反応を繰り返し、数億年を経て、核酸とアミノ酸の重合により、原核単細胞生物が誕生した。いわゆる、化学進化といえるものであ

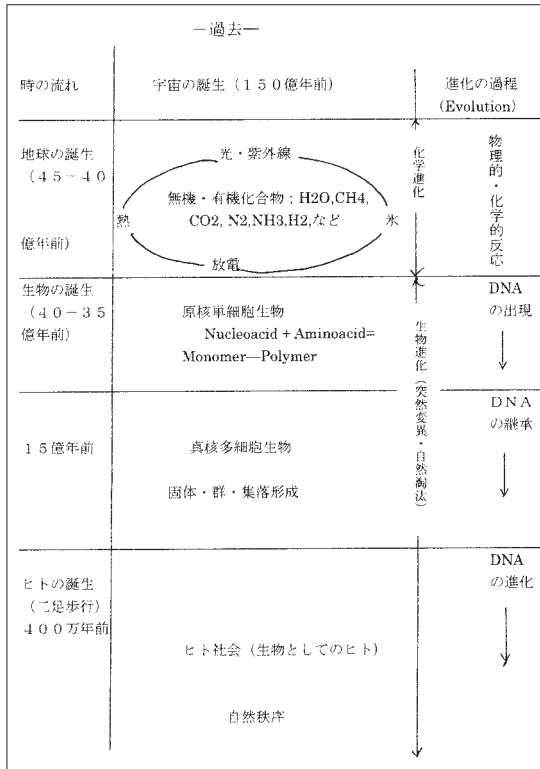


図1 人間の誕生と人間社会の構築【過去】

る。ここに生命が誕生したことになり、DNAの出現となる。

この単細胞生物が20数億年の生物進化を経て、細胞内に核を有することになり、その核内に染色体、DNAを包含する真核単細胞生物の誕生となる。これらはさらに進化を続け5億年後には、真核多細胞生物の出現をみる。

2. ヒトの誕生

真核多細胞生物はその自己増殖の過程においてprogrammingされた「死」apoptosisという細胞死を持ち、自己の造形保存を行うこととなる。ここで、生命の誕生から10数億年後に初めて「死」を持つことになった。

この真核多細胞生物のさらなる進化の過程において、今日見られるような動物、植物の誕生となる。

そして、今から400万年ころから二足歩行を行い、言葉を話す動物が出現した。二足歩行により「脳」は異常に発達し、次第に、拡大、重層化し機能的進化を遂げるようになった。ヒトの誕生である。

ヒトは最初、群れをなしていたが、次第に1つのところに共同で生活するヒト社会を形成していった。

しかし、このヒト社会はほとんど自然秩序のままの野生的なもので、弱肉強食、無秩序の状態、自己増殖、種族保存のための生殖が主であり、体細胞は生殖細胞を保護するためのものに過ぎなかった。したがって、ヒト社会は単なる動物社会に過ぎず、本能のままに記憶と学習によって行動する社会に過ぎなかった。

その後、5万年から10万年を経て、ヒトは文字を使用することとなり、学習能力も一段と高まり、「脳」は異常に発達し、機能的にも著しく進化していった。

3. 人間への進化 (図2)

ヒトが猿人から原人を経てネアンデルタール人から現代人に進化するには、5万年から20万年、さらには数百万年の月日が流れたといわれている。

ヒトの進化の過程において、記憶や学習という単なる条件反射から数十万年から数百万年を単位として、言語や思考力が生じ、単なるDNAによる遺伝にとどまらず、環境の変化に呼応する「脳」へと変化していった。

そして、「心」を持つに至った。すなわち「心」は脳の働きともいえる。

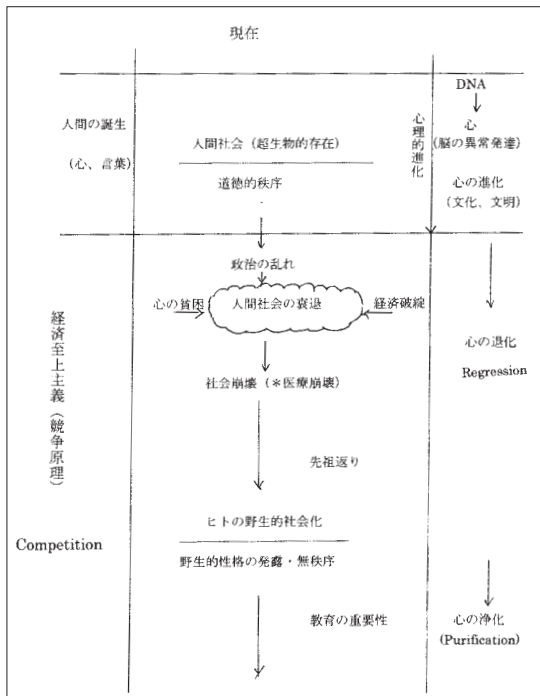


図2 人間の誕生と人間社会の構築【現在】

したがって、「心」は人間のみが存在するものである。

人間は心を持ち、言葉を話し、文字を用いることにより独自の人間社会を構成し、文化、文明を持つに至った。このように、最も大切なことはDNAの進化により、「心」を持つに至ったことである。

このことはDNAの心理的進化と呼ばれている。

しかし、現代社会において著しい進歩を遂げた現代科学研究でさえも、「心とは何か?」「心は何処にあるのか?」の疑問に対しての明確な答えを見いだすことはできない。

このことを歴史的に考察すると、「生命とは何か」が論じられた紀元前の

*古典哲学的生命観に遡る。

哲学者でもない私がこの生命観を述べることは、当を得ていないので、この古典的生命観の流れを教科書的に略述させていただくと、大きく2つの流れがある。その1つは生氣論であり、紀元前300年頃のギリシャのアリストテレスに代表される。「生命は物質に還元できない独自の原理であり、生物は靈魂と身体（形相と資料）から成り、靈魂は身体とともに消滅する」とするものである。そして、フランスのベルグソンもその1人であり「生命のモデルは人間の意識である」と述べている。

他は機械論といえるものであり、その中には心身二元論と唯物論的機械論とがある。心身二元論はフランスのデカルトに代表される。「生命は実体として存在しない。また形相でも無い。生命現象として、物質の特殊な運動として考えられる。魂は肉体とは独立して存在し、魂は永遠不滅である」とするものである。その他、イギリスのチャールス・ダウインも進化論から機械論者ともいえるもので、「突然変異と環境の変化に応じての進化により、物質から生命が生じ、意識、精神へと展開する」としている。

これまでは「心」は靈魂、魂、意識、精神等と呼ばれ、その存在に関して古代エジプト人は心臓に宿るとし、バビロニア人は肝臓に、中世ヨーロッパ人は脳に宿るといわれてきた。しかし、心や精神の座が脳という物質自体に在ると言い出したのは、オーストラリアの医師フランツ・ガル（1758-1828）である。

しかし、21世紀の今日の生物化学的医学的進歩により細胞の微細構造が細かく解明され、DNAの解明へと進んでいるが、いまだ、「生命」、「心」に関しては「想像」の域を出ない。

*「心」とは何か? 何処にあるのか? 肉体の死後には心は存在するのか? 存在するとする

ならば、何処に在るのか？ などの疑問は未だ解決されていない。「心」は思考力を持つものであり、反省から想像、決定、熟慮、理解、信頼、推論、瞑想までも包含するものであるといわれている。しかし、個体の死後は古代の哲学者の考えたごとく、肉体とともに消滅するのか、消滅しないとするならば、何処にあるのか？ 異次元の世界か宇宙の果てなのか？ 不明である。

このように考えていけば、哲学、宗教の世界に入らなければ解決できない。

いまだ、哲学、宗教の門も叩いていない私が申し上げるのは、おこがましいのですが、皆様の前で私見を申し述べることをお許しいただきたい。

——私は、その人の「心」は肉体とともに消滅するものと思っている。しかし、生前に接した人々の「心」やその人が残した作品（芸術作品）の中に生きているものと思っている。前者は心的生命体といえるもので、一部の人々の心の中に存在し、後者は物質的生命体とでもいべきもので、半ば永遠にその人の作品の中に存在するものである。

また、世間話で「遠く離れた人の叫びを聞いた」とか、「亡くなった人の姿を見た」とか、人によっては「石、風、木に心を見た」などのことを、耳にすることがある。これは自分自身の心の鏡であり、人と人、人と物との「心」の共鳴であると考えられる。したがって、自分自身がその人をどのように思っていたのか、思われていたのかによって、大きく違った「心」が映し出される。

したがって、大切なことは、常に自分自身を磨き、心の高揚を計ることである。死後の自分自身にとっても、そして私たちのこれからの子孫にとっても大切なことである。

歴史的に眺めてみると、ヒトから人間に進化し人間として1つの社会を築き、曲がりなりに人も

間として道徳的秩序の上に、人間という超生物的存在、脱生物的存在として1つの集落を築いていた。

日本社会の道徳的秩序の中には、東洋史観から、宗教観から来る武士道精神が強く入っていた。しかし、戦後GHQによりこれらの考えは、「自由」という言葉により完全に消去されてしまった。武士道精神のすべてを賞賛するものではないが、日本の国に育った日本古来の精神であり、この中には、継承すべきたくさんの方の美学が含まれている。

そして、戦後60年を経てアメリカと、日本の追米指導者らにより、日本の良さ伝統が崩壊しつつあるのが現在の日本社会である。

今、日本社会は冒頭に述べたときありさまで、経済破綻、政治の乱れにより、国民の心の貧困を招き、野生人間の出現により人間社会の衰退、果ては崩壊が起こっている。このような社会は、私にあえて言わせていただくならば、「ヒト社会への先祖返り」とでも申し上げたい思いである。

DNAから進化した「心」が、人間の文化、文明により、進化し続けていたものが、社会の乱れにより、「退化」regressionしているように見える。

この状態からの復活は容易なことではないが、これまでに私たちが失った大事なものを取り返す必要がある。

そのためには国民一人ひとりが、一刻も早く、強い倫理観と教育による高い理性を持つことだと思う。すなわち、「心の浄化」に努めなければならない。

Ⅲ. 求める社会 (図3)

「心の浄化」は教育によらざるを得ない。その教育の根底をなすものは、「心」の高揚である。このことは、人格、教養、そして精神の高揚に他なら

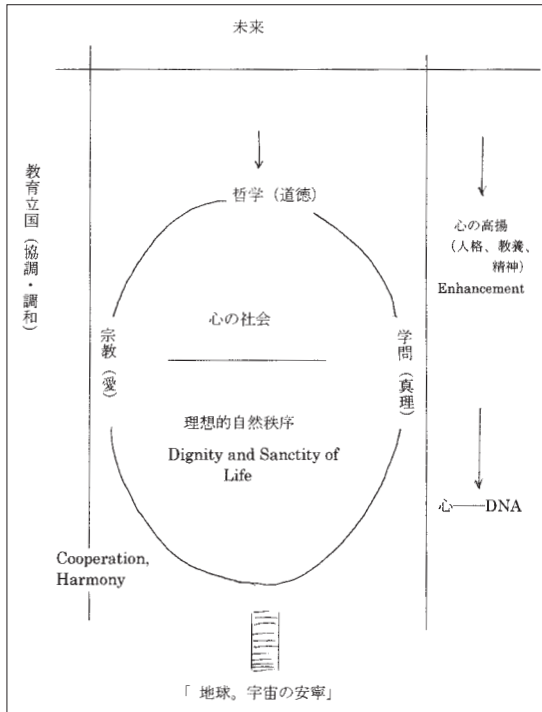


図3 人間社会の構築

ない。

このような高潔な人々によって出来上がった社会は、理想的な自然秩序を根底とするものであ

り、そこには、Dignity of Life and Sanctity of Lifeを尊重する「心」の社会が構成されるものと思われる。このような社会は、むしろ教育立国とも呼ばれるものであり、そこには高い教養によって協調、共生の精神が生まれ、人と人、人と自然の中に真実、道徳、愛の精神が常識として根づいている。

かくして、初めて人間の住んでいる地球が、そして恒星全体を包んでいる宇宙の安寧が得られると信じる。

このような心を持った人間は、途方もない長い長い進化の歴史を経て作り上げられた人間として、これからのDNAに多大な影響を与え、私たちの子孫をさらに大きく進化させるDNAを残すことになると思う。

広大な宇宙から見れば、人間の進化はまだまだこれからであるが、人間一人ひとりが「われ何を成すべきか」「我思うゆえに我あり」、を思考すべきである。

そこには偉大なる真実が見え、単なる虚勢や名誉欲、出世欲などは小さな芥に過ぎないことが理解される。

文献

1. ウィリアム・R・クラーク (岡田益音訳)：「死はなぜ進化したか、人の死と生命科学」、三田出版会、1997.
2. 多田富雄、中村雄二郎編：「生命—その始まりの様式」、誠信書房、1999.
3. 島田華子：「生命の倫理を考える」バイオエシックスの思想、北樹出版、1999.
4. 信州大学教養部生命論座編：「今生命を語る」、共立出版、1990.
5. 加藤尚武、加藤直樹編：「生命倫理学を学ぶ人のために」、世界思想社、1999.
6. 清水幹夫：「生命の体質と起源」、共立出版株式会社、1996.
7. 柳澤圭子：「われわれはなぜ死ぬのか—死の生命科学」、草思社、1997.
8. スティーブン・プリースト (河野哲夫訳)：「心と身体の哲学」、頸草書房、2000.
9. 村上和雄、寿川栄方：「人間、この神秘なるもの」、敦知出版社、2006.
10. ジェームズ・レッドフィールド、マイケル・マーフィー、シルビア・テイパース (山川紘矢、山川亜希子訳)：「進化する魂」、角川書店、2004.
11. 安岡正篤：「知命と立創」、プレジデント社、2007.
12. 鶴田正春：「日本の変革、東洋史観」、コンピュータ・エージ社、2005.